

鳥取市福部町直浪遺跡における考古学的調査

高田健一*・中原計*

Archaeological research of *Sukunami* site on *Tottori*-Sand Dunes in *Fukube*-town, *Tottori*-city

TAKATA ken-ichi*, NAKAHARA kei*

キーワード：鳥取砂丘，砂丘遺跡，クロスナ・クロボク

Key Words: *Tottori* Sand Dunes, Archaeological Site on Sand Dunes, Humic Soil *Kurosuna*, *Kuroboku*

1. 調査の目的と経緯

鳥取市福部町直浪（すくなみ）遺跡は、砂丘に立地する遺跡として古くから知られてきた。戦後間もなくの1946年に湯山池干拓のために土砂採取をしたところ、土器、石器等の遺物が出土したのが遺跡発見の直接の契機という。その後、地域の公民館活動として遺跡の科学的な解明へ乗り出していったのが1955年の第1次調査である（福部村教育委員会1956）。調査の結果、「縄文、弥生、須恵の三期の遺物の包含層」が発見され、長期にわたって遺跡が形成されていること、三つの遺物包含層に介在する風成砂層の存在により、飛砂の静止期に人間活動が及んだと考えられること等が指摘された。また、木片、貝等の自然遺物にも注意が払われ、当時としては極めて高い学際意識に支えられた調査が行なわれたのであった。以後、直浪遺跡は、1967年の帝塚山大学考古学研究室による学術調査等を経て、鳥取県の重要遺跡として広く知られるようになっていった。

これまでの調査成果によると、直浪遺跡は砂丘の発達と人間活動の相互関係史を把握するには、極めて好適な条件を備えた遺跡である可能性が高い。ただし、開発に伴う既往の発掘調査は、いずれも小規模な面積であるため、遺跡の範囲や内容を十分明らかにするには至っていない（福部村教育委員会1976, 1995, 2001）。また、1981年には、文化庁が砂地に立地する遺跡の保存方法を検討するための調査地に選定され、これまでの中では最も広い面積が調査されたが（文化庁1983）、第1次調査の際に確認された三つの遺物包含層の性格は十分に追究されていないように思われる。報告された土層断面図からすると、調査範囲内で広く把握されたクロスナ層（砂丘遺跡における遺物

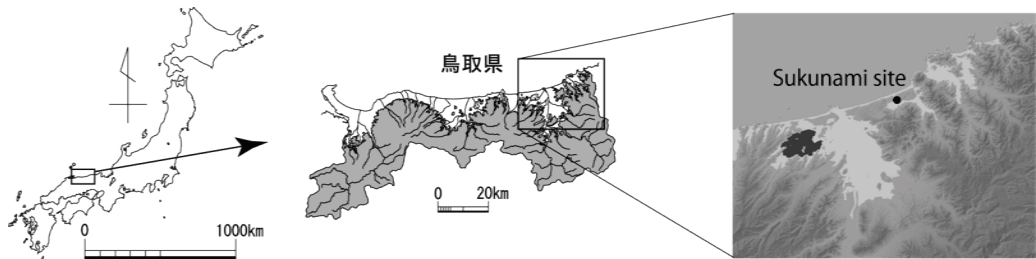


図1 直浪遺跡位置図

* 鳥取大学地域学部地域環境学科（Dept. of Regional Environment, Faculty of Regional Sciences, Tottori-U）

包含層)は上位にある1層のみで、下位のクロスナ層は、湧水にはばまれたためか、狭小な断ち割りの範囲内でしか捉えられていない。また、下位のクロスナ層でも新しい時期の遺物を混在するように報告されている点からすると、調査地点は、必ずしも良好な堆積状況でなかったようだ。

いずれにせよ、平面的な広がりや基本層序の把握は、遺跡を評価するために必要な最も基礎的な課題である。直浪遺跡においてこの課題に取り組むことは、地域における人と自然環境の相互関係を具体的かつ実証的に追究するために重要な活動と考えられた。そこで、筆者らが担当する2012年度の地域調査実習のテーマとして、直浪遺跡の考古学的調査を掲げることとし、発掘調査とボーリング調査を行なった¹⁾。本稿は、その調査成果の概要を報告するとともに、今後の課題と展望を示すものである。

II. 周辺の地理的・歴史的環境

直浪遺跡(図2-1)が立地する鳥取市福部町(旧福部村)は、山陰海岸国立公園の特別保護区・天然記念物の鳥取砂丘(浜坂砂丘)の東側に位置する。町域のほとんどは山地・丘陵地で、海岸部に浜坂砂丘から連続する福部砂丘が発達しているため、沖積平野は塩見川、箭溪川が形成する狭小な範囲にはほぼ限られる。現在では盆地状となっている湯山近辺は、もともと海跡湖と考えられる湯山池が存在しており、塩見川の河口付近にも、江戸中期以前までやはり海跡湖の細川池が存在した。低地部の多くは砂丘の後背湿地であり、台風時等には水没することも多い地形環境である。

このような内水面の周辺は、縄文時代に盛んに利用されたと考えられ、栗谷遺跡(図2-2)は、山陰における代表的な例の一つである。栗谷遺跡は、縄文時代前期前葉に始まり、以後中期～後期中葉にかけて定着的な活動拠点となったと考えられる。とくに後期初頭～中葉の遺構、遺物が豊富である。ドングリ、クルミ、トチ、ヒシ等を貯蔵していた貯蔵穴群が多数検出されており、土器・石器の他に豊富な木製品、かご等の編組製品が良好な遺存状態で出土している(福部村教育委員会1989a, 1989b, 1990)。これらの遺物は、縄文時代の生活様式を知る上で貴重な資料として1994年に重要文化財に指定された。後述するように、直浪遺跡でも遅くとも縄文時代中期前半には遺跡形成が開始されたと考えうるが、豊富な石錘や軽石製浮子の存在からすると、栗谷遺跡よりも漁労活動の比重が高かった可能性がある。

縄文時代後期後葉～弥生時代前半期にかけて、現在知られているこの地域の考古資料は少なく、判然としない。直浪遺跡では、弥生時代中期中葉～後葉古段階の土器の出土が知られ(亀井・清水1982, 文化庁1983)、少なくとも中期中葉段階には、砂丘において人間活動が可能な状態であったことを窺い知ることができる。鳥取砂丘内の散布地である追後遺跡(図2-5)とおぼしき場所で、かつて扁平片刃石斧や太型蛤刃石斧等が採集されているのも(大野1898)、このことと関連する可能性がある。また、弥生時代後期後葉段階の遺物も比較的多く見られ、直浪遺跡以外にも栃木山遺跡(図2-9)等で土器が出土している。湯梨浜町・長瀬高浜遺跡、米子市・博労町遺跡等の砂丘遺跡の調査事例も踏まえると、鳥取砂丘周辺でも同様の時期に遺跡形成が行なわれている可能性が高い。

古墳時代前期の状況は判然としないが、中期以降と考えられる小型の円墳が丘陵上に多数営まれている。そのうち、径13mの小円墳ながら小札鋳眉盾庇付冑・三角板革綴短甲のセットをもつ湯山6号墳(図2-B黒丸)は有名である(福部村教育委員会1978)。古墳時代中期中葉は、山陰一円で有力な前方後円墳の築造が低調になる一方、中期に新たに登場する長頸鎌等の新式の武器を副葬する小円墳が急増する。湯山6号墳の被葬者は、畿内の大王勢力から優遇された先駆者の存在と考え



1 直浪遺跡 2 栗谷遺跡 3 孤山城跡 4 ニツ山城跡 5 追後遺跡 6 長者が庭第1遺跡 7 長者が庭第2遺跡 8 浜坂遺跡 9 栃木山遺跡 10 秋里遺跡
11 岩吉遺跡 12 天神山城（因幡守護所）跡 13 嵐が鼻土手 14 鳥取城跡 15 太閤ヶ平 A 緑山古墳群 B 湯山古墳群（6号墳）C 海士古墳群（25号墳）
D 蔵見古墳群（3号墳）E 小畑古墳群 F 平野古墳群 G 開地谷古墳群 H 覚寺古墳群 I 円護寺古墳群 J 浜坂横穴墓群 K 荒神山横穴墓群 L 濃山古墳群
M 布勢古墳 a 服部神社 b 荒坂神社 c 三嶋神社 d 賀露神社 e 伊和神社 f 摩尼寺

図2 直浪遺跡周辺のおもな遺跡・歴史的社寺

られるが、港津となりうる潟湖に面した立地から、海洋交通の結節点に立った人物像が想定できる。また、直浪遺跡の東側後背丘陵には緑山古墳群が知られ、出土した須恵器等から後期のものと考えられる（大村・福井 1958, 大村・治部田 1958）²⁾。ほぼ同様の時期の直浪遺跡では、砂丘下に埋没した丘陵上に竪穴住居等の遺構が営まれており（福部村教育委員会 1976）、上位のクロスナ層からもこの時期以降の遺物が出ることが知られている。砂丘の安定化によって潟湖縁辺の開発が進んだと考えられるが、その実態は明らかでない。今後さらに追究する必要があるテーマである。

直浪遺跡周辺は、古代の法美郡服部郷に比定される地域である。当地は、古代山陰道の通過ルートが想定され、陸路でも交通の要衝になったと考えられる。佐尉駅を細川周辺に、因幡国庁への経路を榎峠越えて鳥取市滝山に出るルートに当てる説が有力であるが、砂丘を通過して鳥取市秋里方面に抜け、国庁へは直接連絡しない説もある（中林 1997）。これらは遺称以外に有力な手がかりがなく、遺構、遺物はほとんど知られていないのが現状である。一方、康和元（1099）年に因幡守であった平時範が記した日記（『時範記』）によると、調査地周辺の景観にすでに砂丘が存在し、通行可能な状況であったことが窺える。国司赴任時に地元の神社に奉幣するため、時範は国府に近い宇倍宮を出発、坂本社、三嶋社（図2-c）³⁾、賀呂（露）社（図2-d）、服社（服部社）（図2-a）、美歎社の順に参拝したことを記すが、賀呂社から服社への経路は「次又乗船渡川白濱路参服社」とあって、砂丘を経由したことを記録している。「白濱路」の詳細は分からないが、近世に但馬往來の中道通と呼ばれた湯山池北岸を通過するルートは検討すべき候補の一つであろう。これまでも直浪遺跡では新砂丘砂層から平安時代～鎌倉時代と考えうる土師器等が一定量出土しており、漁労具（漁網用の錘）である管状土錘も多い。時範が見た風景の中に直浪遺跡が存在した可能性は高い。

やがて、近世前期に砂丘が大きく拡大し、直浪遺跡周辺で展開した中世以前の間人活動の痕跡を

深く砂に埋めていった。現在の浜湯山集落の北端部に集積された多数の五輪塔群は、現代の農業基盤整備工事の際に出土したものが集められたという（福部村 1981）。出土地点等の詳しい報告がないため、一箇所からの大量出土なのか、複数箇所から出土したものの集積なのかもよくわからないが、火輪の形態等から推測すると、古くても15世紀中頃、多くは16世紀以降に位置づけられそうである。同様な類例として、白兔身干山砂丘出土の宝篋印塔・五輪塔群がある（小谷 1983）。古墳時代のクロスナ層を覆う新砂丘砂上に200基近く存在したという石塔群は、15世紀中葉～16世紀末に位置づけられ、出土した陶磁器類の年代観もそれを支持する（久保 1981）。これらが厚さ数mに及ぶ風成砂（新砂丘Ⅱb層）に埋没していたわけだが、その一時停止面に寛文年間（1661-1672）、あるいは享保2（1717）年の紀年をもつ墓石⁴⁾が存在していたという（豊島 1975）。いずれにせよ、近世前期のうちに砂丘が拡大し、地形環境を大きく変貌させていったと考えられよう。白兔身干山例を参考にすると、浜湯山例も同様な時期に砂丘に埋没したと考えられる。

近世以降は、砂防と農地拡大がこの地域の重要な課題となったと考えられ、その過程で湯山池や細川池等の干拓、砂丘地の農地化が進められてきた。この歴史は、とくに近世後期以降の200年ほどのスパンで、自然の脅威の克服史として語られる場合が多いが、砂丘といかに対峙し、関わってきたかは、縄文時代以降この地域で展開した人間活動をさまざまな面で規定してきた問題であり、より豊かな歴史像を描いていく必要がある。

Ⅲ. 発掘調査の概要

本稿で報告する調査は、1955年の第1次調査から通算して7次目に当たるものである。既往の調査が行なわれた区域よりも西に調査区を設定した（図3）。遺跡内を流れる水路よりも西側のこの地点では、これまであまり調査が行なわれておらず、遺跡の西側への広がりを確認する必要があると考えられた。そこで、トレンチによる発掘調査とハンド・ボーリングによる調査を行なった。調査対象地は、調査着手以前は進入の糸口さえ見いだせないような藪であったが、伐採によって地表面が白砂層であること、湧水によって沼地と化している部分もあることが判明した。

発掘調査に先立って試験的に行なったボーリング調査の結果、調査区域内は、砂層が西側に向かって深くなり、地表から2m以上新砂丘砂層しかない部分もあること、一方、東側ではクロボク層が比較的浅い位置にあることが判明したため、調査対象地の東端部で、過去の調査区域よりも西側約20mの地点にトレンチを設定した。東西0.5m、南北10mの規模で先行トレンチを設定して掘り下げ、基本層序を把握した後、トレンチの北から5mまでを西側に1.5m拡張した。クロボク層上面まで掘り下げを行ない、クロボク層が確認できなかった部分についてはローム層上面が検出された時点で、掘下げを終了した。

トレンチ内の基本層序は、上から黄褐色砂層（表土）、黒褐色砂層、黒褐色シルト層（クロボク層）、褐色粘土層（ローム層）である。ただし、トレンチの北端から南へ約4m地点より南側では、黒褐色シルト層（クロボク層）が確認できず、上から黄褐色砂層（表土）、黒褐色砂層、黄褐色砂層、褐色粘土層（ローム層）であった（図4）。

ローム層は標高4.0m付近にその上面があると考えられる。検出面以下の掘削を行なっていないため、層の厚さは不明である。遺物は出土していない。

クロボク層（東壁⑩層、西壁⑧層）は標高約4.2mの地点から厚さ約20cmで堆積している。クロボク層はトレンチ北端から2mまでは面的に、それ以南では部分的に検出された。トレンチ北端部では、クロボク層上面に密着して比較的大きい縄文土器片が出土した。縄文時代中期前半の船元式

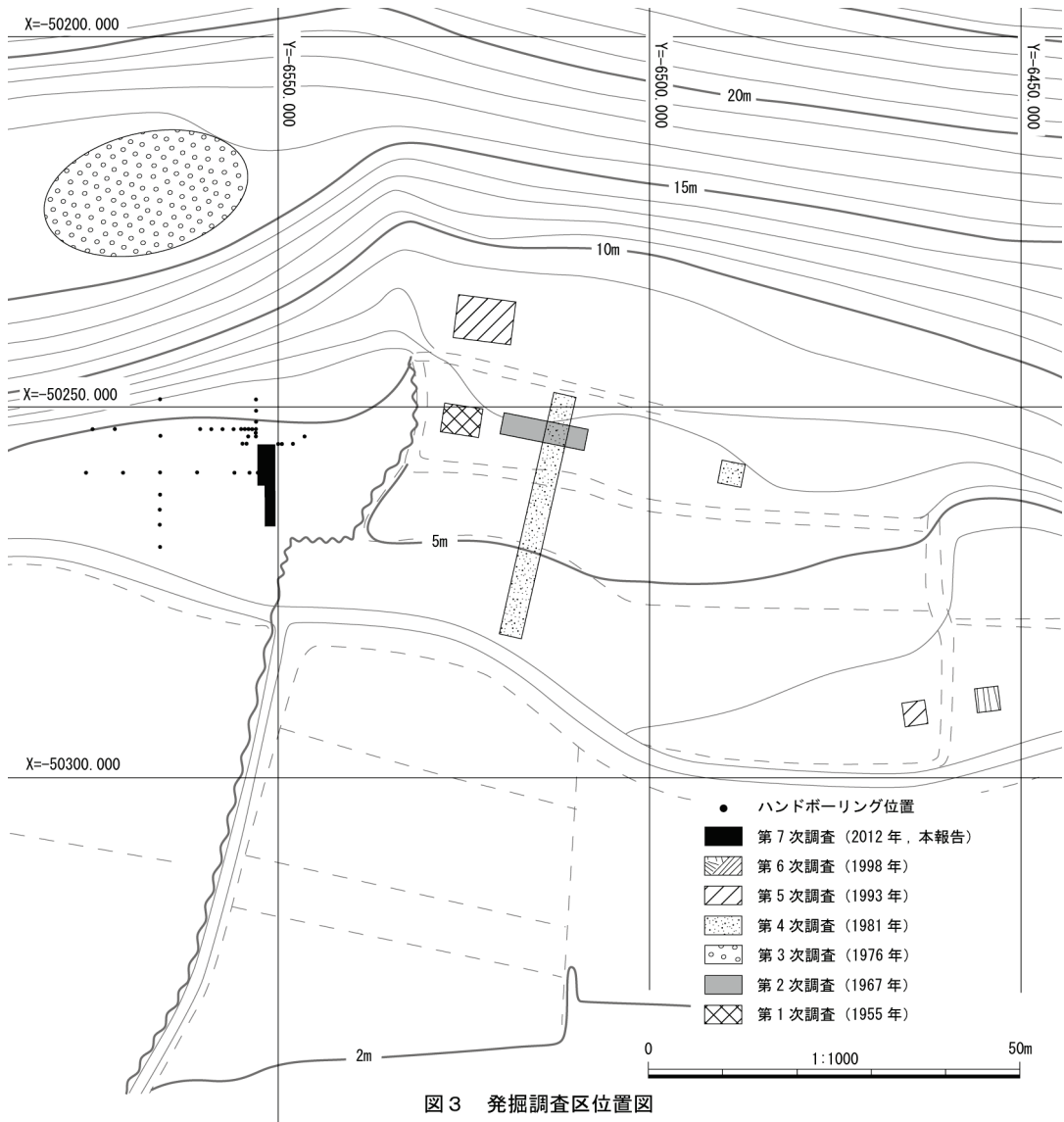


図3 発掘調査区位置図

と考えられるものが多い。なお、このクロボク層の上層には、シルト質ブロックが混じる砂層（東壁⑨層）が乗る。シルト質ブロックは、直下のクロボク層に由来するもので、本来は砂層と混じらないため、これは2次堆積層と考えられる。縄文土器の多くはこの層から出土している。

黄褐色砂層（東壁⑧層）はトレンチの北端から4m以南の地点で検出され、標高約4.6mから厚さ約30cmで堆積している。土質は細砂である。クロボク層が削平された後のローム層の上に直接堆積している。この層からは、近世の陶磁器片が出土している。木炭のAMS法による放射性炭素年代測定の結果（後述）からも近世以降の堆積層と考えられる。

黒褐色砂層（東壁④～⑦層、西壁②～⑦層）は標高約4.8mの地点から厚さ約30cmで堆積しており、最も厚いところでは約60cmある。土質は細砂である。クロボク層由来と考えられる径1cm程度のシルト質ブロックが混じる。この層からは縄文時代～近世、近代の遺物が出土した。

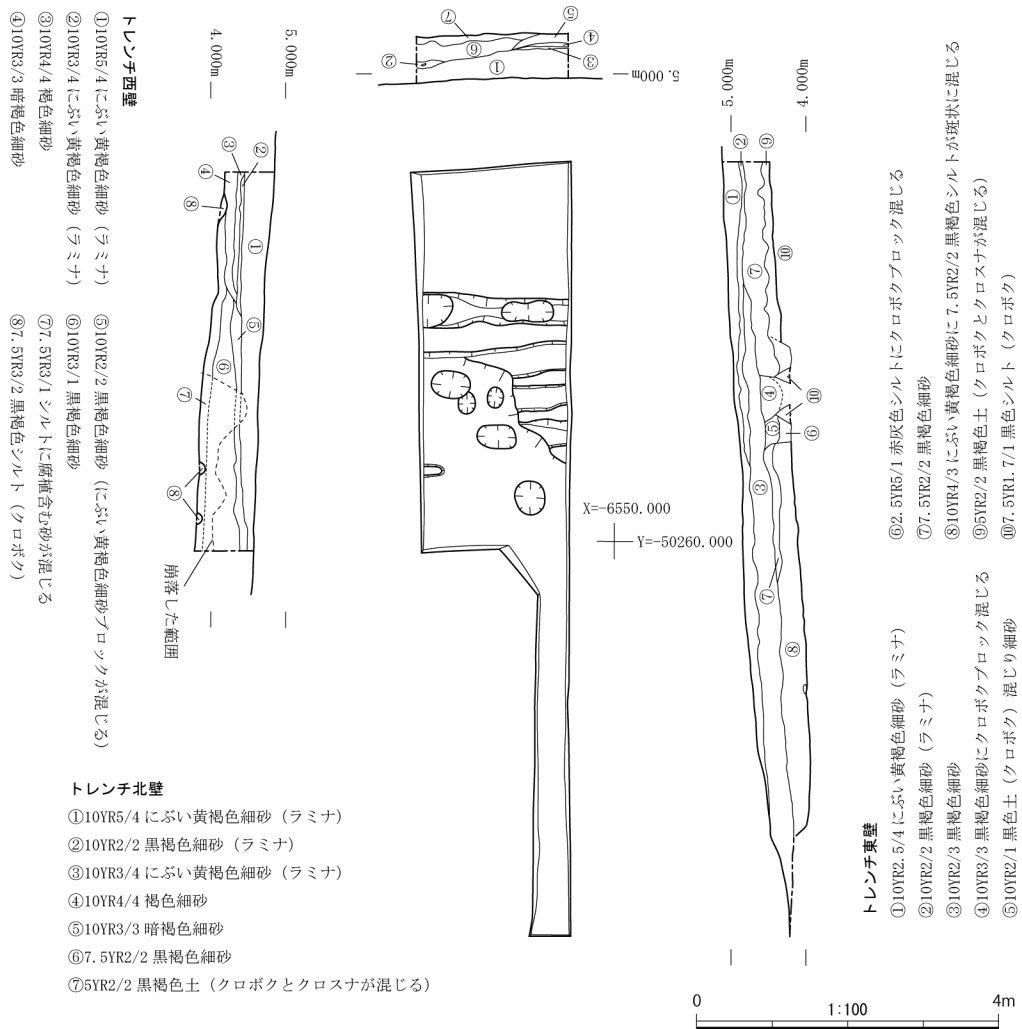


図4 トレンチ平面図

黄褐色砂層 (表土, 東壁①層、西壁①~③層) は地表面から標高 4.8m までの間に厚さ約 30cm で堆積している。土質は細砂である。トレンチ北壁の黄褐色砂層 (①, ③, ④層) では、西側ほど厚さが増している。層内では水平ラミナが観察され、流水によって形成されたと考えられる。西壁の堆積状況とあわせて考えると、これらの層は黒褐色砂層が溝状に落ち込んだ部分に、北東からの水流により堆積したと考えられる。この層からは、現代のプラスチック製品が出土している。

調査開始当初は、東壁⑦層のような黒褐色砂層を遺物包含層であるクロスナ層と考えたが、近現代の遺物や下層のクロボク層由来のシルト質ブロックを混じること等が判明するにつれて、比較的近い時期にかく乱された堆積の可能性が高いと考えられるようになった。したがって、トレンチで確認された土層のうち、北半部で検出されたクロボク層だけがかく乱を免れたものといえる。

かく乱の要因として、トレンチ中央部で検出された東西方向の溝状の掘り込みが関与していると考えられる。掘り込み面を確認できなかったものもあるが、⑦層上面からほぼ垂直に掘り込んでいるものもあって、人為的な掘削と考えられる。調査地は、かつて果樹園だったようで、果樹周辺に

掘削される施肥のための溝の可能性はある。クロボク層が確認できなかった部分については、ローム層までかく乱が達していると言える。

これまでの範囲確認調査や後述するボーリング調査結果を総合すると、トレンチは旧湯山池北岸縁辺に位置していると考えられる。このトレンチ以西および以南ではクロボク層は確認できないので、今回の調査地点は現状で確認しうる遺跡の西南端部と言える。

IV. 出土遺物

今回の調査では、土器や石器等およそ 800 点の遺物が出土した。多くはかく乱層である黒褐色砂層から出土した小片であるが、クロボク層から出土したものもある。

土器の内訳は、縄文土器 329 点、土師器 229 点、須恵器 15 点、陶磁器片 5 点がある。その他、帰属時期を特定できない土器片が 200 点余り存在する。完形品がなく大半は数cm以下の小片であるため、全体の器形、文様構成が推定できるものは限られる。ここでは、ある程度時期の推定が可能な縄文土器の一部を報告する（図 5、6）。

1. 縄文土器

クロボク層上面で出土した土器（図 5-1～6）は、縄文時代中期初頭～前半に位置づけられるものである。また、かく乱層でも最下部のクロボク層に近い位置で出土したもの（図 5-7～18）には、縄文時代中期のものが多い。中期前半の船元式は過去にも報告されているが（亀井・清水 1982, 文化庁 1983）、中期初頭の鷹島式段階のものはこれまでに知られていなかった。また、既存の出土品は帰属する層序が十分明確ではないが、本調査ではクロボク層上面から出土した点が注目される。かく乱による影響が皆無とは言えないが、これらが砂層を介在せずに出土した事実は、砂丘形成の起点を考える上で重要である。

鷹島式と考えられるものは、典型的なものとして、平面形が五角形を呈し、ハイガイの殻頂部と考えられる圧痕文を施した薄い突帯が貼付けられた深鉢底部片（図 5-17）がある。また、節が細長く、節内に繊維痕を残さない縄文が施されたもの（図 5-3、5、12、13）は、その可能性がある（泉 2008）。3 は、外面に単節縄文 R L とともに、三角形を呈する刺突文が施され、内面は丁寧なナデである。5 は薄手の土器で、外面にかなり細長い節をもつ単節縄文 R L を施し、内面は丁寧なナデで仕上げる。また、口縁内面の段状肥厚部と考える破片がある（図 5-7）。これも中期初頭段階のものと考えておく。

鷹島式とほぼ同様の層準から出土しているが、やや大振りな節内に繊維痕が見られる縄文をもつもの（図 5-1、2、6、10、16、18）は、船元式に降ると考えられる。1 は口縁端面に刻み目をもつ深鉢片と考えられる。外面に単節縄文 R L、内面はケズリを施す。2 の撚りは L R であり、内面は丁寧なナデを施す。6 も節のやや粗い縄文を施したものである。また、径 3 mm ほどの焼成前穿孔がある。10、16、18 はいずれもやや厚手の土器で、やはり外面に単節縄文 R L、内面はナデを施す。16 は、キャリパー形深鉢頸部の屈曲部の破片であろうか。C 字形爪形文をもつ破片（図 5-8）も同様の屈曲を示す破片であるが、いずれも屈曲部の稜線が顕著でない点からすると、船元式でも新しい段階のものと考えうる。なお、外面に薄い突帯を貼付けた部分の小破片で、突帯上面に刻み目があるもの（図 5-14）、突帯を挟み込むように C 字形爪形文を施し、円形の刺突文を加えるもの（図 5-15）がある。これらも船元式と捉えて良いであろう。また、4 は、外面にサルボウ等の二枚貝腹縁による条痕文を施したものである。

トレンチ東壁の⑦層～⑨層に相当する層から出土したものとして、中期末の北白川 C 式に位置づ

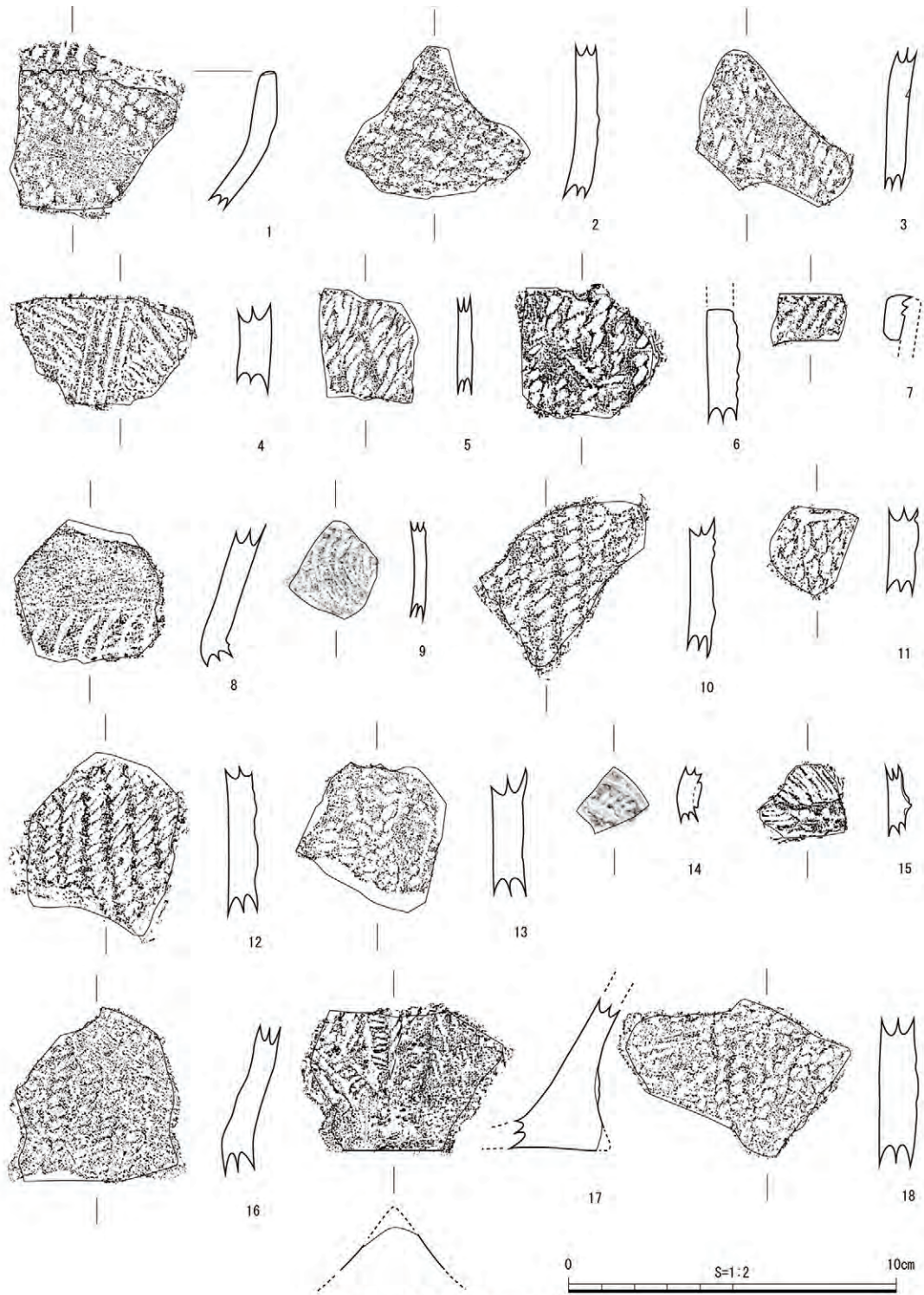


图5 縄文土器実測図・拓影

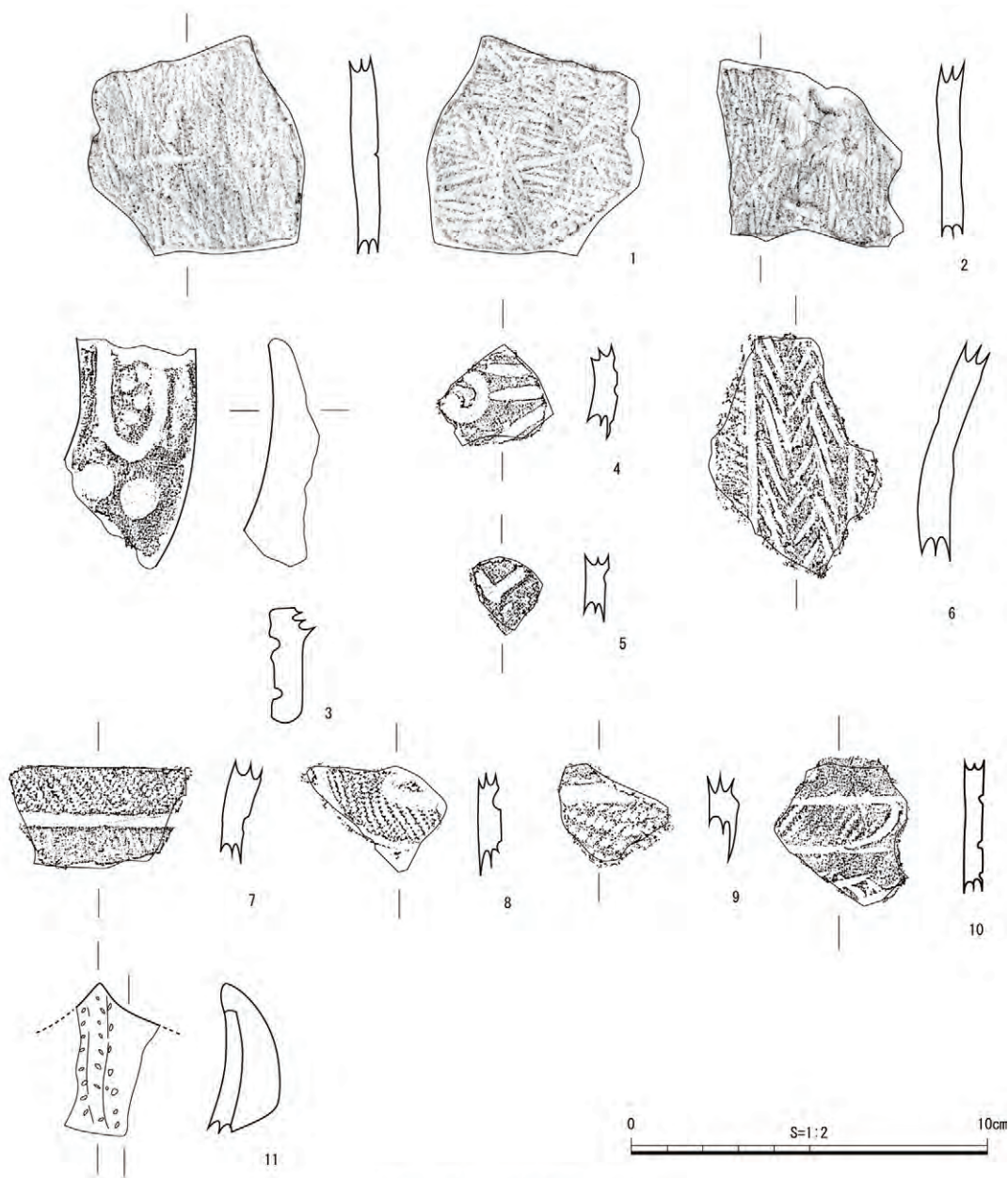


図6 縄文土器実測図・拓影

けうる破片もいくつか存在する(図6-3~6)。3は、大波状口縁の側面と考えられる破片である。棒状工具による太い沈線と曲線的な文様、刺突文が施されている。外面にも文様が施されているが、破損のため、沈線があること以外は分からない。4、5は類似した沈線による文様で、渦状、直線状、V字状文を施す。6は、ハマグリ等の二枚貝腹縁による矢羽状沈線文を縦位に施すものである。その両側には幅1cm程度の縄文を施した区画帯がある。このような文様構成をもつ土器は、北陸地方の大杉谷式と関連が考えうるかも知れない。

縄文時代後期の土器としては、磨消縄文土器群(図6-7~10)がある。文様構成が把握できない破片が多いため、時期の特定は難しいが、太い沈線による区画内に細かい節をもつ縄文を充填するもの(図6-7, 8), 太い沈線による区画内にやや粗い節をもつ縄文を充填するもの(図6-9), 細い沈線による区画内に細かい節をもつ縄文を充填するもの(図6-10)等のバリエーションがある。これまでに直浪遺跡から出土した事例からすると、後期初頭の中津式~後期中葉の布勢式が候補として考える。太い沈線をもつ7, 8はより古い中津式の段階に、9は現在みえる沈線の外側にもう1本沈線が施されているようであり、福田KⅡ式段階の3本沈線の可能性も考える。細い沈線で線が交錯する10は、新しい段階の布勢式と理解することも可能であろう(柳浦2010)。11は、巻貝殻頂部によると考えられる刺突文が施された波状口縁の一部である。

2. 縄文土器以外の土器

小片が多いため時期比定は困難なものが多いものの、弥生土器、土師器、須恵器と考える破片が存在する。弥生土器と考える破片の中には、甕胴部に施されたと思われる櫛描き列点文が残る破片もあり、中期段階の土器の存在が予想される。

また、赤色塗彩が施された高坏、ないし碗形土器と考えられる土師器片があり、古墳時代中期後葉~後期前葉のものが一定量存在すると考えられる。須恵器片も存在するが、時期を判断しうるほどの大きさ、部位の破片はない。

また、若干の陶磁器片も存在するが、近世以降の製品と考えられる。

3. 石器

石器は、礫石器10点が出土している。その内訳は石錘5点(未成品の可能性のあるもの1点含む)、敲石1点、磨石1点、石皿1点、不明2点である(図7, 8)。

石錘は、円礫の両端を数回の打撃により打ち欠いた礫石錘であり、いずれもほぼ扁平な円礫を素材としている(図7-1~4)。多くはかく乱層である暗褐色砂層内から出土しているが、1はクロボク層直上から出土した。5は、打ち欠きは見られないものの、大きさや重さから石錘として利用するために遺跡に持ち込まれたものと考えられる。重量は、1, 2がそれぞれ44g, 46g, 3~5はそれぞれ98g, 97g, 112gである。50gと100gを中心に重量が二分できる状況が窺われる。

6, 7は磨石、敲石と考えられる。6は擦痕等を観察できないが、全体によく摩滅がすすむ。大きさから見て磨石と判断する。7は一端に顕著な打撃痕が残る棒状の石器である。調査で出土したのではなく、調査地周辺の分布調査の際に表採したものであるが、縄文時代の敲石と推測する。図8は大きさから考えて石皿の可能性のあるものである。平面形は楕円形を呈していたものと考えられる。上面部がほぼ平滑な平面となっている。砥石と考える余地もある。クロボク層直上から出土した。

V. C14年代測定の結果

トレンチ調査において出土した木炭、およびクロボク層の土壌の放射性炭素年代測定をAMS測定により行なった。なお、分析は株式会社加速器分析研究所に委託した。木炭は黄褐色砂層(西壁第⑧層)から出土したものの3点であり、土壌はボーリング調査で採取したものの1点である。

出土した木炭3点(A~C)の測定結果は、 $\delta^{13}C$ 補正值でそれぞれ、 220 ± 20 yrBP, 180 ± 20 yrBP, 160 ± 20 yrBPであった。暦年較正で可能性の高い年代値(2σ 値)は、木炭Aが1764calAD-1800calAD(42.9%), 木炭Bが1729calAD-1810calAD(56.0%), 木炭Cが1726calAD-1785calAD(43.8%)である。これらの結果から、出土木炭はおおむね江戸時代中期~後期の年代値を示しており、黄褐色

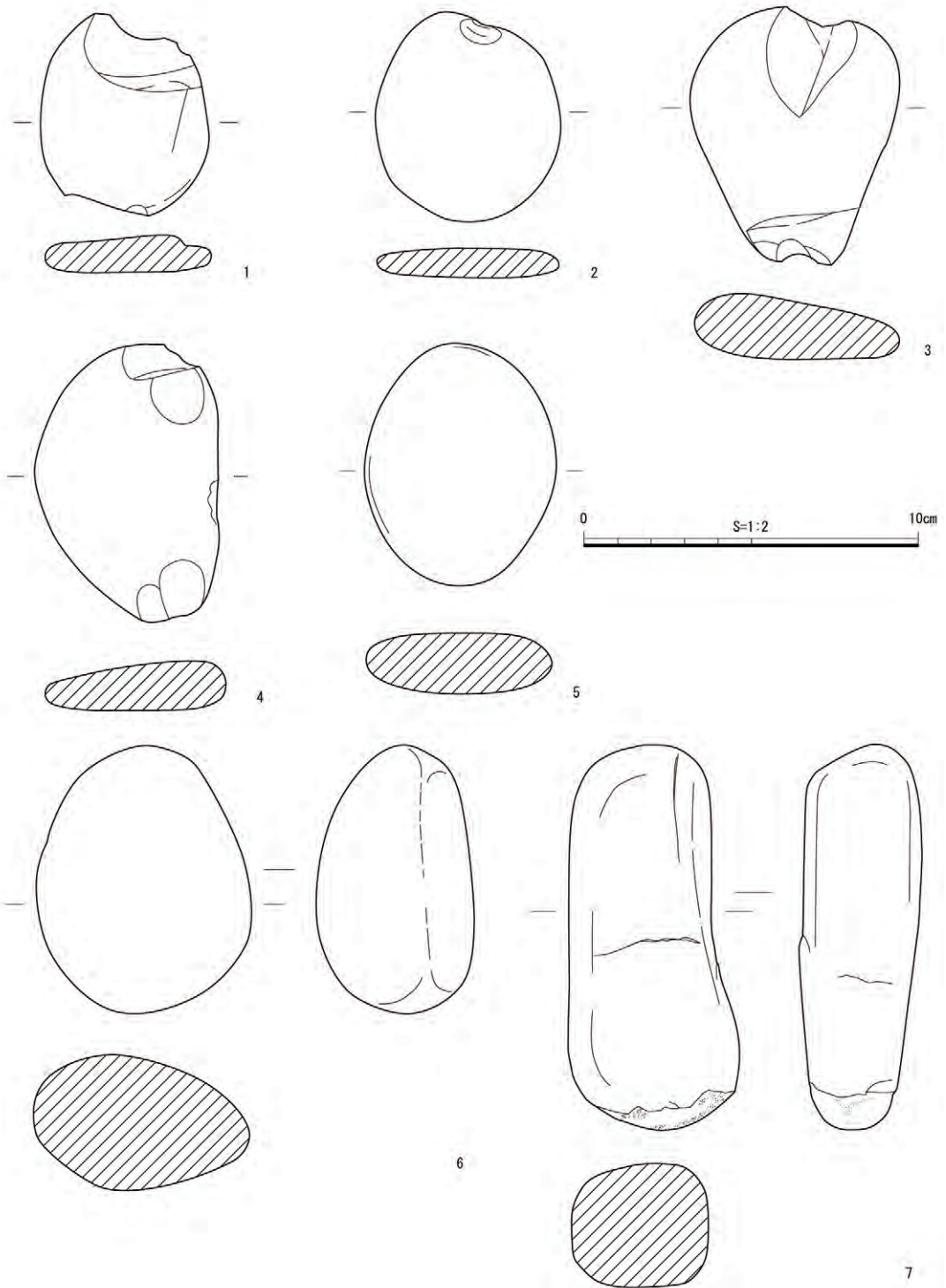


图7 石器実測図

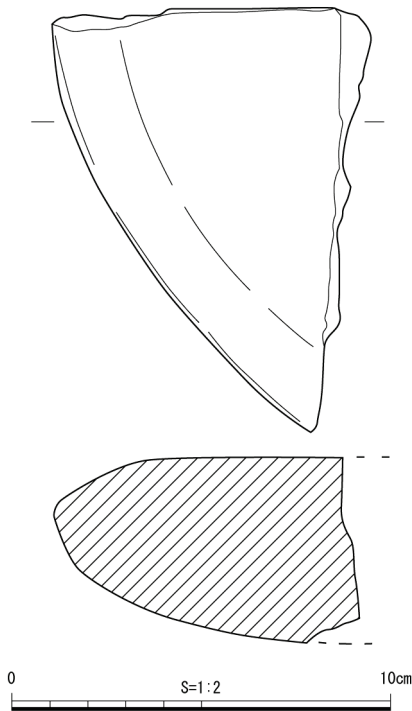


図8 石器実測図

砂層がそれ以降の時期の堆積であることが分かる。

クロボク層の土壌の測定結果は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正值で $5510 \pm 30\text{yrBP}$ であった。暦年較正年代範囲で可能性の高い年代 (2σ 値) は、 4405calBC – 4328calBC (78.9%) である。この値は、およそ縄文時代前期末にあたると言える (辻 2013)。クロボク土壌の形成年代の1点を示したものと考えるべきであるが、中期初頭から考古資料が出始めることを考えると、砂丘地の開拓の始まりを示すものと理解できよう。

VI. 周辺のボーリング調査

トレンチ調査を補うため、トレンチで把握した土層の延長上でボーリングを実施した。ボーリング器材は径3cmの半円形刃先、採土部長100cmのハンド・オーガーを使用した。地表から100cmずつ採土し、クロボクないしはローム層、あるいは継柄を使用しうる地表下200cmまで掘進することとし

た。先述のとおり、調査地点は大きなかく乱をこうむっていることが判明したので、主として東西方向にクロボク層の広がり把握できるようボーリング地点を設定した。土層の把握は、褐色砂、腐植混黒褐色砂、クロボク、黄褐色ロームの4種類を識別するにとどめ、結果を柱状図にまとめた (図9)。ここで「腐植混黒褐色砂」とするものは、いわゆるクロスナ層を捉えたものである可能性も否定できないが、今回のボーリング範囲では、トレンチ調査で把握した、新旧の遺物を含むかく乱層である可能性が高いであろう。

まず、南北方向の柱状図を見ると、トレンチ北端で確認したクロボク層が徐々に高い位置で見られるようになっており、連続した地形面が存在すると思われる (南北ライン②)。その上層には腐植混黒褐色砂が間層を介さず堆積している。肉眼観察では、トレンチで確認したかく乱層と変わらないため、かく乱の範囲は北側にも広く及んでいる可能性がある。

トレンチの西側に設定したボーリング地点では、ローム層の検出面が1mほど急に下がる地点があり、それより南では継柄を使用してもローム層が検出できなかった (南北ライン①)。崖状に地形面が下がっている可能性が考えられ、旧湯山池の汀線に近い可能性が考えられる。

次に、東西方向の柱状図を見ると、トレンチ北壁の延長線上の西側では、湧水により沼地化した部分で刃先から砂が抜け落ちることが多かったため、北側に1.5mずらしたライン上でボーリングを行なった (東西ライン④)。トレンチの西側1m以内の地点では、クロボク層が観察できたが、それより以西では砂層下に直接黄褐色ロームが存在するようになり、著しく削平を受けている可能性がある。トレンチよりも6mほど西側でローム検出位置が急に下がる地点があり、さらに、20mほど西の地点では、継柄を使用してもローム層が検出できなかったため、旧地形は南側同様に崖状

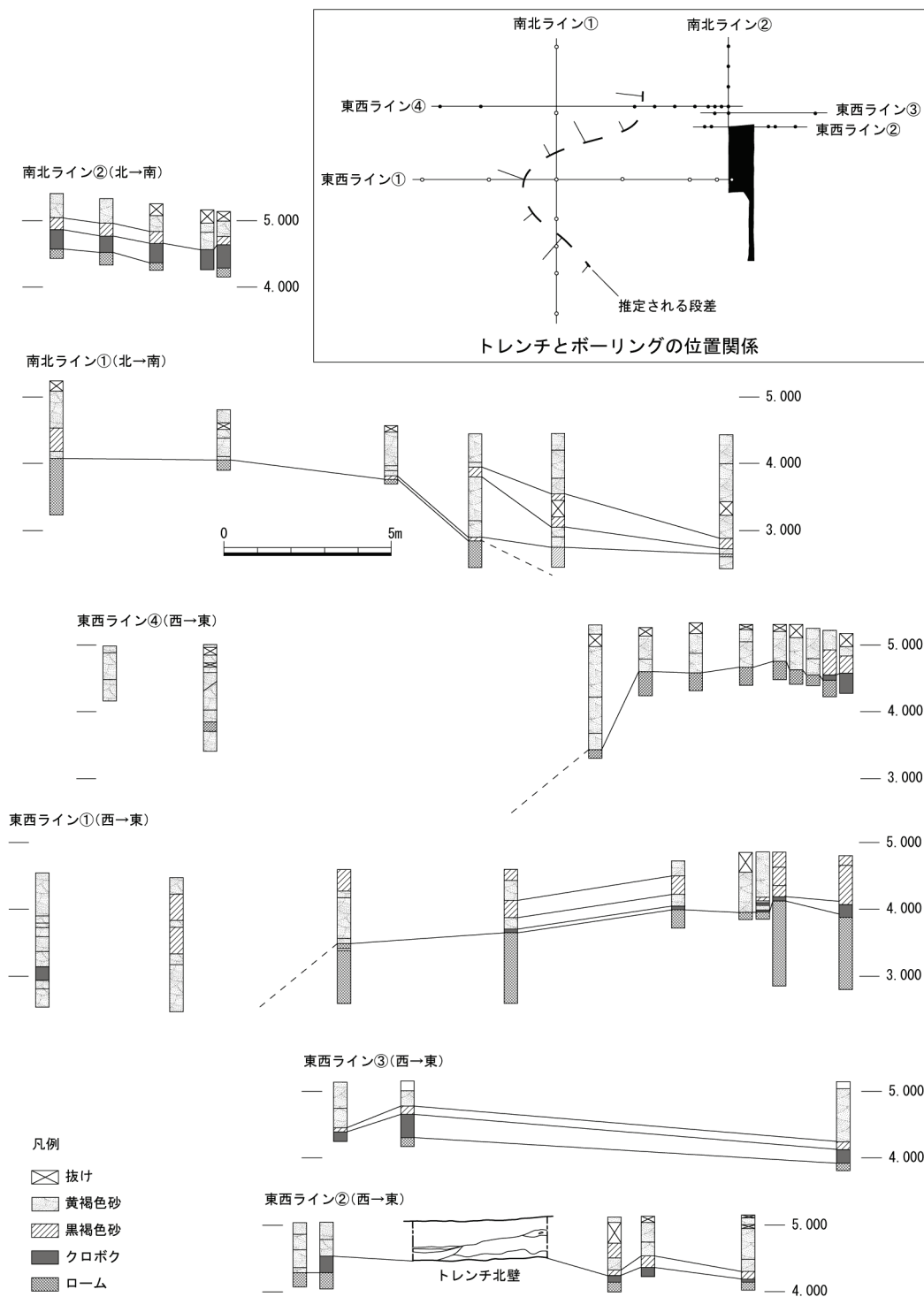


図9 ボーリング柱状図

を呈していると考えられる。一方、東西ライン④より5mほど南の東西ライン①では、さらに7mほど西側の地点までローム層が検出できたが、やはり崖状に落ち込んでいくようである。つまり、トレンチ設定地点の西側には、同じ標高の地形面が岬状に突出してあるものの、さらに西側、南側では崖状地形が入り込んでいると考えられる。1900(明治33)年に大日本帝国陸地測量部が作成した旧版地形図(細川)を見ると、湯山池北岸には砂丘側に入江状に入り込む地形がいくつかあり、砂丘下に埋没した谷部からの湧水が流入している部分があると考えられる。本調査地も湧水点に近接していることを考慮すると、現在は砂で埋没しているが、かつては谷部が存在した可能性が高い。なお、東西ライン①の西端では、褐色砂層の上面にクロボク土が検出されているが、オリジナルな堆積とは考えられない。二次堆積やかく乱の影響などが考えられよう。

トレンチ東側に設けたボーリング地点では、いずれもローム層とその直上のクロボク層が検出できたが、近接した距離でも検出面の高さが一定でない(東西ライン②, ③)。クロボク層の厚さも薄い部分があるため、東側もかく乱や削平をこうむっている可能性が高い。

VII. まとめと展望

本調査は、砂丘の発達と人間活動の相互関係史を把握するため、直浪遺跡において、遺跡の平面的な広がりや基本層序の把握を目的として、発掘調査とボーリング調査を行なった。

調査の結果、トレンチを設定した場所は元々果樹園であった影響もあり、ローム層にまで達するかく乱を受けていた。そのため、本来その上に堆積していたはずの遺物包含層は、ほとんど残存していないことが判明した。ただし、かく乱の深度は北側ほど浅かったため、トレンチ内でクロボク層を検出できた部分もある。

出土した遺物については、縄文時代中期初頭の鷹島式が出土したことが特筆すべき点である。これまでの調査で知られていた最も古い土器は縄文時代中期前半の船元式であったが、直浪遺跡周辺で人が生活し始めたのは、もう一段階古い時期までさかのぼることが明らかとなった。これらの土器は、砂層を介在せずにクロボク層直上で出土しているものがある。削平やかく乱の影響が大きいと考えられるので、確実に原位置を保った出土状態かどうかは保障できないが、これが原位置を保っているとすると、少なくとも当該調査地点までは砂丘が拡大していないことを示しており、砂丘が発達していく時期の下限を考える際に重要な情報と言えよう。今後は、より良い条件の調査地点でこのことを検証していく必要がある。また、クロボク層の放射性炭素年代測定結果では、縄文時代前期末の年代が出ており、砂丘地における人間活動の開始時期を物語る可能性がある。栗谷遺跡では前期の土器も出土しているから、直浪遺跡でも今後確認できる可能性がある。

今回の調査では、当初の目的の一つである基本層序の把握はできなかったものの、遺跡の範囲確認については一定の成果を挙げることができた。遺跡の平面的な広がりからみると、調査地付近がその南西端部に近いと考えられた。調査地の西側には谷状地形が存在し、旧湯山池に注ぐ湧水池点のほとりと評価できる場所と考えられる。そのような水辺の環境に縄文時代の人びとが生活の拠点を築き始めた状況を想像しうる。今後の調査において良好な資料が得られれば、より詳細な歴史像を描くことが可能になる。

謝辞

調査にあたっては、土地所有者の浜本直広氏、新寿明氏にご協力をいただいた。また、谷岡陽一氏(鳥取市教育委員会)は文献のご教示と調査を円滑に進める上で重要なご助言を、白石武士氏(三光株式会社)は調査地の

環境整備について貴重なご援助をいただいた。さらに、小玉芳敬氏（鳥取大学地域学部）は、砂層の堆積状況の理解について有益なご教示をくださった。出土した縄文土器について、濱田竜彦氏（鳥取県教育委員会）、幡中光輔氏（出雲市）からご教示をいただいた。篤くお礼申し上げます。

なお、学長経費（「鳥取砂丘」総合研究プロジェクト-山陰海岸ジオパークから世界への情報発信をめざして-、平成24年度、研究代表者：小玉芳敬）や文部科学省特別経費（地域再生を担う実践力ある人材の育成及び地域再生活動の推進、平成25～27年度、地域再生プロジェクト運営委員会委員長：藤井正）の補助を受ける機会に恵まれ、経費面でも調査を円滑に進めることができた。関係各位に感謝申し上げます。

註

- 1)発掘調査およびボーリング調査は、2012年9月6日から19日まで行なった。参加者は、松阪聡、大脇世名、岡本穰、木戸口望美、津島大地、馬上昌大、船石庸祐、山崎智司、脇田菜摘、今西悠人、岡本昌樹、栗田結依、清水裕美子、下出結奈、中川篤、中山幹太、前口一晃、南泰志、向臺浩二（鳥取大学地域学部地域環境学科学学生、当時）および高田健一、中原計（同教員）の21名である。現地調査の概要については、『地域調査実習（地域環境）報告書』第13巻（2013年度）において速報的に報告したが（今西他2013）、その後、今西悠人、栗田結依、清水裕美子、下出結奈、中山幹太、中川篤を中心に遺物等の整理を進めた。調査実習報告書と記述が重複する部分もあるが、本稿の内容をもって正式報告とする。
- 2)出土した須恵器はしばらくの間、鳥取大学学芸学部（現地域学部）で保管されていたらしいが、その後行方不明となり、現在は2号墳出土の鉄刀を除いて現物を確認できない。残念ながら、文献記載の実測図では、詳細な時期判断が難しい。
- 3)現在の三嶋神社は、鳥取市秋里525番地に所在する荒木三嶋神社で、1934（昭和9）年に荒木神社と合祀されたものである。現在は千代川捷水路に面した位置にあるが、元の三嶋神社の鎮座地は、東側に大きく蛇行した千代川旧流路沿いにあり、袋川との合流点に近い場所だったと考えられる。江戸前期に本社が賀露神社に移された後は、小さな祠が建てられていたが、それは国道9号線バイパス建設に伴って道路用地外に移設された。
- 4)豊島1975文献では寛文年間と記すが、享保2（1717）年銘の墓石とする文献もある（久保2010等）。

参考文献

- 泉拓良 2008 「鷹島式・船元式・里木Ⅱ式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション、pp.502-509
- 今西悠人・岡本昌樹・栗田結依・清水裕美子・下出結奈・中川篤・中山幹太・前口一晃・南泰志・向臺浩二 2013 「鳥取市福部町直浪遺跡の調査」『地域調査実習（地域環境）報告書』第13巻（2013年度）、鳥取大学地域学部地域環境学科、pp.7-14
- 大野延太郎 1898 「旅中所見」『東京人類學會雑誌』第151号、pp.23-32
- 大村雅夫・福井淳人 1958 「因幡・縁山1号墳」『ひすい』第55号
- 大村雅夫・治部田史郎 1958 「因幡・縁山2号墳」『ひすい』第56号
- 亀井照人・清水真一 1982 「直浪遺跡」『えとのす』第18号、pp.35-43
- 久保穰二郎 1981 「身干山・金崎両遺跡の出土遺物について」『鳥取県立博物館研究報告』第18号、pp.39-56
- 小谷仲男 1983 「中世の石造美術」『新修鳥取市史』第1巻古代・中世篇、鳥取市、pp.784-819
- 豊島吉則 1975 「山陰の海岸砂丘」『第四紀研究』第14巻第4号、pp.221-230
- 辻誠一郎 2013 「縄文時代の年代と陸域の生態系史」『講座日本の考古学3 縄文時代』上、青木書店、pp.61-81
- 中林保 1997 『因幡・伯耆の町と街道』富士書店
- 福部村 1981 『福部村誌』

- 福部村 2000 『新編福部村誌』 上巻
福部村教育委員会 1956 『直浪遺跡発掘調査報告 (予報)』
福部村教育委員会 1976 『直浪遺跡発掘調査報告書』
福部村教育委員会 1989a 『栗谷遺跡発掘調査報告書 I』
福部村教育委員会 1989b 『栗谷遺跡発掘調査報告書 II』
福部村教育委員会 1990 『栗谷遺跡発掘調査報告書 III』
福部村教育委員会 1995 『福部村内遺跡発掘調査報告書』
福部村教育委員会 2001 『村内遺跡発掘調査報告書 (直浪遺跡)』
文化庁 1983 『遺跡保存方法の検討-砂地遺跡-』
柳浦俊一 2010 「山陰」 『西日本の縄文土器 後期』 真陽社, pp.153-186

(2015年10月2日受付, 2015年10月6日受理)